

40.12.17

No. 622

一、一九六五年回顧版

○○○氏の優雅なる生活

佐藤政権になつてからつ有無のない安定成長の掛け声は一九六五年を安定ムードのうちに流し流されました。

戦後二十年。日本は一応高度に成長しました。

サラリーマンの最大公約数は3DKの団地族です。亭主が御出勤の後はママさん自治の社会です。血眼になって子女の情操教育に情熱を傾ける一方、ボウリング場に娯楽を求めるなど平和な御時世です。

また巷間には老若男女の別なく美容お洒落が氾濫。美岩美石に現実をぬかす御仁まで出て世は真に天下泰平にひたり切っています。

だが、この安定ムードが、ひとつ間違つた時、炭坑爆発、漁船遭難などという悲劇を生んだのです。一家の支柱が倒れて遺族は悲惨のどん底に落とされてしまうのです。そして、道路という道路に自動車という恐怖の弾丸が走り、交通戦争による犠牲者は激増しています。幸福な家庭が、ある瞬間に音をたてて崩れる……網渡りの世の中なのです。

頼みの綱の為政者は国民そっちのけで乱斗国会を演じますます政治への無関心をあおる始末。平和と戦争の岐れ道だというのに……。しかし汚職都議会には断を下しました。

また年の瀬が近づくと定期便の物価値上げ問題が家庭をおびやかします。為政者の政治のまづきが不況を処理しきれなくなつて、そのシワ寄せは善良な市民へも……。

どうやら、一九六五年は安定ムードの中に不安定な現実をにぎしたまま、暮れてしまいそうです。

625